



硯町長の祝いの書額

が公民館建築の基本金である。土地建物の経費合計約七十万円也を使ったが、わが村の農協から四十万円也を借用し多少の予備金もあって立派な公民館が完成しその落成式が行われたのである。その当時は年々と物価が上がる時代―高度な日本の経済成長の時代だったので、思い切って借金をして敢行したことが幸いしたのである。この喜びは思えば村落梅田に居住した人々の団結と決意にあった。全く苦節二十年の汗と油の結晶であったのである。

昭和三十四年一月吉日新村の誕生を祝って、盛大な祝賀式を開催した。時あたかも新春を迎えて間もなく、初潮の満ち来る八田江には大漁の幟を押し立てた幾十艘の入船が朝陽に輝いていた。新装成った晴れの公民館には、万国旗のはためく中、参議院議員福岡日出磨をはじめ村内外の来賓や梅田の大人も子供も相集りて、豪華な公民館の新落成を祝い、梅田村誕生という華やかな式典であった。その時の記念に当時の村長碓壮次は「和氣満堂」・教育長故副島忠一は「大和一致」の掛軸および中学校長故山口孝行の「梅の絵」小学校長鶴 清の「村誕生す苦節二十年今朝の春」―の祝句等を寄贈して、新興村の誕生を祝福した。梅田と八田との間を流れる八田江は、元は随分広がったが、大正十三年の頃は渡し舟であった。この渡し舟も一艘だったので、兩岸よりこの船に綱をつけて置き、渡りたい客人がこの綱を引っ張っては川を渡ったものである。現在の橋がかかったのは昭和三十五年の頃でこれに依って、東与賀と川副との交流がはじまり交通上、産業

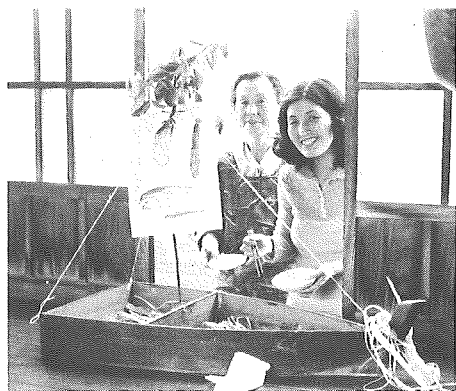
上その他日常生活にも非常な便益を被った。もともとこの梅田の土地は、八田江改修の際泥土の置き場として積み上げられ、その後は堀と堤防の中間に広い埋立地を作った。この埋立地が戦後になって有償登記されて、新開拓地となったのである。

一 一 上 古 賀

上古賀は東与賀町内では最北端に位置し、北は佐賀市本庄町鹿の子と境し、東は鍛冶屋に西南は田中および下古賀に隣接している。現在の世帯数二七であるが、農業・製造業・建設業・公務員・卸小売・寺院等、農村集落としては多種多様の職種である。

上古賀という地名については、古来この周辺一帯は窪地であってその「窪」―が「空閑」となまり、更にその「くが」が「古賀」に変わったものと言い伝えられている。貞享四年（二六八七）の郷村帳には、田中村の小字に「上古賀・新村」と記載されている。

古老（故船津丸忠作）の談話によれば、現在地の子供遊園地付近は昔より天神屋敷と呼ばれ、雑木山の中に小さい祠を祀ってあった。その境内中央に幹の胴回りが大男五人で手をつなぎ合わせてやっと抱きかかえる程に大きい楠の巨木が天空にそびえ立っていた。樹齢も幾百年を数え、遠く南方の有明海を航行する船舶や漁船が、北方を見定める目標であつたらしい。この楠の大樹も後日伐採され売却されて、現在の八幡神社新築費用や免田購



川神祭の木舟

入の資金になったと語り伝えられている。

しかもこの大楠の果実が、勝鳥その他鳥類のよい餌となって喰われたり飛散して、この村落には楠の老木があちこちに散在し生育し繁茂して、四季折々の風情を飾っている。かくて現在でも「天神やぼ」「鴨村」「かむら」等の昔の地名が残っており、往時を偲ぶことができる。

この村の住民は敬神崇祖の念に厚く守護神として、西部に八幡神社と天満宮を合祀し、東部には菩提を弔う栄蔵寺の伽藍と共に、その境内に「勇敢なる水兵」の記念碑とその墓地がある。記念碑の側に公民館を設立して、これらを中心に庶民一和の精神で昔からの良

き伝統を生かしつつ、新時代に即する村落の平和と発展に努力している。

特に児童・生徒の教育についても強い関心を持ち、終戦後町内では一番早目に地区育友会を結成して、地域ぐるみによる教育活動を推進した。従って村落行事の成人式・川神祭・祇園・クリスマス等の諸行事も育友会行事と不離一体的に開催したり、学童のいない家庭も進会員となつて全世帯がこれに参加していた。また男子の中年層と老年層の三夜待や女子の六夜会・葉桜会、更に老人層の福寿会等それぞれのグループによる親睦と研修につとめ、それらがこの村落の繁栄に大きい効果を挙げている。

八幡神社と天満宮

東与賀町の中央を南北に貫いて佐賀市へ通ずる県道に沿い、この村の西部に位置して、しょう酒な宮居がある。普通「お八幡さん」の尊称でこの村の守り本尊として鎮座されている。この宮は八幡神社と天満宮の二つの神が合祀されていて本町内では珍しいことである。大鳥居の正面に二神併祀の額東が大きく掲げられている。明治三十四年に再建されたが、昭和三十年五月に改築され、更に同四十三年七月県道の拡幅工事の際にも改築工事を余儀なくされた。

天満神社の御神体を見ると、佐嘉柳町佛師北村儀平作明治十年三月とある。改築前の社はいつの頃建てられたものか不明。鳥居の右柱には明治二十五年辰歳九月吉良日・当邑中建之とあるので、比較的に新しい。ただこの宮の境内は創建以来広々とした社宇と境内を誇っていたが、佐賀市へ通ずる県道開通以来相当に狭くなった事は残念である。

狭くなった境内には太神宮・中尊神等一緒に並べて祀られてある。太神宮の右側面に「享保十七年八月吉日處立之」と刻まれているので、今から約二五〇年前のものである。その台石には寄進者とみられる横尾千之允・蒲原治兵衛・徳久善蔵・全儀左衛門等の氏名が列記されている。これらの氏名は現在下古賀や飯盛・新村等に居住する人々の姓を考えて、この上古賀から下の村落へ漸次分家や移住したのではないかと思われるが、このことは正保絵図にも出ていて一つの証拠とも言える。

上古賀

両宮の中で天満宮の例祭は毎年十一月二十三日（勤労感謝の日）に、八幡社の例祭は十二月十五日と決めて挙

行している。従前は十二月十五日と二十五日（新米ができた頃）であったが、終戦後前記のように改正された。この両日は早朝七時に免田（約一反歩宛）を耕作した番帳の戸主が、お供えの赤飯（約二俵の餅米）を蒸してお宮に運ぶ。これを全村落の老若男女全員が参詣して神酒を戴き赤飯の供饌を食べ、豊年を感謝し家内の安全を祈願する。当日の昼は番帳の家で戸主全員が集合し、規約によるご馳走に加えて芸者も加わって賑やかな祝宴が開かれる。夕刻には小中学生の子供たちにも供饌が渡されたり、夜は青年仲間が公民館で祝饌が供されて、この一日は全住民挙げて祭礼気分と親善融和の佳き日となる。特に祭礼前夜のお当夜には、小中学校の男児等がお宮の参籠にこもり遅くまで住民の参拝を待ち、甘藷（菓子・蜜柑）とお茶を接待する風習が続いている。この頃は寒気が襲って小雪ともなるが、広い神苑に焚火をたいて暖をとると共に神への感謝と豊年を祈るのである。

年中行事の一つに正月五日定例的な大般若会がある。この八幡神社の社殿に老若男女の氏子が相集って、家内安全と災害免除の祈禱をする。祭主は区長（連絡員）が当たり、栄蔵寺と慶閭寺（本庄町）の住職が般若経六〇巻を奏上する。祈禱札は各家庭に祀りまた村境にも立てて邪神悪霊の進入を防ぐのである。その昼は全戸主が公民館に集合して、神酒を戴き一年間の村落安全と親善親睦の新春宴会を催すのである。

この村でも子供たちの年間行事や遊びごとは、ほんげんぎょう・土龍打ち・凧揚げ・竹足・独楽・べちゃ・ねん棒等があり、女子では毬つき・お手玉・草輪つき・羽子板等その他動物を相手に、とんぼ釣り・ぼんのう挿し、洞受け（鮎とりかご）泥鰌受け・投針等楽しいものが多かった。今日では大分減ったが、二〇数年前までは童大将を中心にして、こうした遊戯や行事に熱中し日の暮れるまで打ち興じたものである。

一一二 田 中

田中は東与賀町の北部で下古賀と下飯盛の中間に位置しており、近世初年の干拓村。正保絵図に村名が見え、貞享四年（一六八七年）の郷村帳にも田中村の小字に「上古賀・新村」と記されている。現在の世帯数二六一昔は農家ばかりだったが、今日では専業農家は僅か数戸に過ぎない。農家に代わって公務員・会社員・電気業・商店・寺院等多種目産業の村落である。

この村の成立について明確な資料は無いが、現在の公民館所在地―天神宮付近は、その昔「慶徳庵」と称する寺院があった。古老の故雪竹平吾の説に依ると、この付近に大鳥居と寺門の二つがあったらしい。「慶徳庵」は佐賀市本庄町鹿の子慶閭寺の末寺で、四代目の禅師が宝永六年（一七〇九年）これを創建したという記録が残っている。庵の広さも五畝二六歩もあり、その側に建っていた天満宮も立派な形態を備えていたという。

この慶徳庵を中心にして当時は土地が高く、村落の南部は低くその高



天 満 宮 ・ 境 内